

# JELA NEWS

ジェラニュース 第24号 2011年4月15日発行 発行責任者 森川 博己

日本福音ルーテル社団 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp 口座番号 00140-0-669206 加入者名 日本福音ルーテル社団

難民支援/アジア子ども支援/ブラジル子ども支援/ポランティア派遣/リラ・プレカリア(祈りのたて琴)研修講座/奨学金制度/宣教師支援

## 私たちは、キリストの愛をもって、日本と世界の助けを必要とする人びとに仕えます

「お前たちは、わたしが飢えているときに食べさせ、のどが乾いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ、はっきり言うておく、私の兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、私にしてくれたことなのである。」 マタイによる福音書 25章35節～36節、40節



2011年2月15日から25日にかけて、8名の参加者をインド、CRHP(総合的地域健康プロジェクト)へ派遣し、第6回インド・ワークキャンプを開催いたしました。今回のテーマ「出会う」の通り、毎日の作業(今回は義足とミサンガ作り)を通して、また見学や現地の人たちとのディスカッションを通して出会いが授けられ、たくさんの恵みが神様から与えられました。

**【この号にはこんな記事が】** アフリカを脱出して日本で難民に(匿名難民)……2 リラ・プレカリアを学びつつ(徳善親子)……3  
リラ・プレカリア公開講座のお知らせ……3 インド・ワークキャンプ2011参加者報告……4-6 ブラジルでの2年間の奉仕から学んだこと(中島 涯)……7 お知らせ(第8回世界の子ども支援チャリティコンサート/東日本大震災被災者のためのご寄付のお願いなど)……8

# 難民の声

## 「アフリカを脱出して日本で難民に」

J・K

1月にチュニジアで始まった民主化運動は、瞬間にエジプト、リビア、パレーン等、アフリカと中東地域に広がり、新聞・テレビのニュースで連日取り上げられています。長年の強権政治に嫌気がさした民衆の自由を求める動きは、今後どのような展開を見せるか予断を許しません。今回は、アフリカのコンゴ民主共和国での迫害から逃れ、日本で難民に認定されたJ・Kさん(仮名)の記事をご紹介します。

みなさん、こんにちは！ わたしはコンゴ民主共和国(DRC: Democratic Republic of Congo)出身のJ・Kと申します。日本政府から難民として認められ、いま、国際基督教大学(ICU)で国際関係学を学んでいます。学費全額を大学から、そして教科書・参考書代をJELAから支援していただいています。JELAのみなさんとのよき交わりに感謝しています。

### ●コンゴ民主共和国の現状

DRCはアフリカの中央に位置する、アフリカ大陸で三番目に大きい国です。周囲を九つの国(アンゴラ、ザンビア、タンザニア、ブルンジ、ルワンダ、ウガンダ、スーダン、中央アフリカ共和国、コンゴ共和国 \*注:「コンゴ共和国」は「コンゴ民主共和国」とは別の国です)に囲まれています。国内には鉱物資源が豊富にあり、それらは携帯電話、パソコン、DVD装置の部品や貴金属製品に用いられています。しかし埋蔵地の多くを武装集団が占拠しており、国連平和維持軍の駐留にもかかわらず敵対勢力が長年にわたって争って、ある地域はつねに一触即発の状態にあります。武装集団は鉱物資源の違法な輸出で得た利益で武器を買っています。国連の専門家による最新レポートでも、武装集団が鉱物を独占し利益を得ていると記されていますし、グループ間の軋轢、鉱物の利権をめぐる争いは、性的暴力、児童・女性の奴隷的処遇等の人権問題を引

き起こしています。武装集団のみならず政府軍も国民に対して非人道的な行為を繰り返しているのが現状です。DRCの内戦を終結させるための国際平和協定や和平合意にも関わらず政情の不安定は解消されず、何百万人というコンゴ人の命が奪われ、百万人以上の国内避難民が存在しています。DRC内部の衝突は「女性に対する戦争」と呼ぶこともできます。多数の女性や女兒をレイプすることで、家族や地域社会を壊滅させようとしているからです。多くのグループがこの暴挙に加担していますが、責任の大半はコンゴ軍にあります。政府は表現の自由を無視し、人権擁護派のコンゴ人が脅威にさらされたり、理由なく逮捕され襲撃や暴行を受けても守ろうとはしません。人権活動家の多くは、迫害されている人の代わりに意見を表明するだけで拘束されて尋問を受け、ひどい場合には殺されてしまいます。

### ●国を出るまで

わたしはクリスチャン一家に生まれ、兄弟姉妹はみんな熱心なキリスト信徒です。DRCにいたときは大学で地域開発を学んだのですが、国の現状に黙ってられず、またキリスト者としての信仰と人権擁護の思いから、差別されている女性や不利な立場にある人々を支援したいと強く感じました。それで大学卒業後は「女性の人権」という地域NGOに加わりました。政府軍や反乱軍が特定の地域で行っている虐待や人権蹂躪を、アムネスティ・インターナショナル、国連、ヒューマンライツ・ウォッチといった国際人権団体に知らせるのがわたしの役割でした。スワヒリ語、英語、フランス語ができたので、集めた情報を世界に発信できたのです。しかし、この仕事にかかわりだしてから、政府に知られるようになり、国内の混乱を外の世界に知られたくない政府はわたしを脅迫し、不安に落としいれました。あるとき、わたしが住んでいた地域で少女や女性たちが多数の男性から集団レイプを受ける事件があり、わたしはこれ

を世界に訴えました。すると何度も個人的に呼び出されて尋問や拷問を受けました。そしてある日、地方自治体の責任者から2時間以上にわたる尋問をされた後、「こんなことを続けていると、そのうち命を失うぞ」と恫喝されました。翌日も尋問と虐待はつづき、夜遅く釈放される前に「お前は政府の面汚しだ。いまやっていることをやめないと殺す」とすごまれました。しかし、虐げられている人への愛と情熱から、わたしは働きをやめることができず、彼らに追われ続けることになりました。そして2004年1月、命の危険を察知したわたしは、ついに国外脱出の道を選ばざるをえなくなりました。

### ●日本での苦勞と希望

なんとか日本に逃れてくることができましたので、すぐに難民申請をしましたが、手続きに一年もかかりました。そのあいだ、何時間も何回も同じ質問を繰り返されて、たいへんな忍耐がいりました。一年後によく難民条約上の難民と認められ、永久に日本で生活できる身になってからは、いろいろなところで働きました。わたしは早い段階から自分が日本社会に受け入れられたと感じていますが、それは何よりも積極的に行動した結果だと思っています。NGOには全面的に頼らないで、必要な時にだけ助けてもらうようにしました。自分で人生を切り開きたかったのです。なんでもかんでも助けてもらっていると、それに慣れてしまい、自分の可能性をのばせないとわたしは思っています。日本社会に溶け込むのに役立つもう一つの要素は日本語です。日本語を学び、それを積極的

に使うことで多くの友だちができましたし、日本についてもたくさんを知ることができました。ここまで読むとわたしの日本での生活は順調に見えるかもしれませんが、難民に認定された直後には辛いこともありました。それは、NGO のあいだに難民が新しい人生をスタートするのを支える、きちんとした制度やメカニズムがなかったことです。難民に認定された人が不安を感じないですむように教え導くものが何もなかったのです。難民に認定された人をほったらかしにするのではなく、新たな生活へと安心してスムーズに移行するための支援体制がぜひとも必要です。そうでないと、たとえ難民になれたとしても、その先どうしていいか、わたしたちにはわからないのです。このようなシステムが今後充実するようにと願っています。

## 継続的 難民支援ボランティア 募集

JELA は都内の一角に難民申請者用のシェルター「ジェラハウス」(家具その他の生活必需品備付。家賃無料、高熱水費 JELA 負担)を運営していますが、利用希望者が多く、政府のシェルターも十分でないため、この4月からもう一軒、都内の別の一角にもシェルター「ジェラハウス2」を購入して運営する計画です。

新しいシェルターでは難民の方に日本語や PC の操作を教える部屋を設ける予定です。また、就労が禁じられているため部屋にこもりがちな難民の方々に、息抜きとなるような催しを提供できないかとも考えています。小さな子供がいる難民の家族を数年前に東京ディズニーランドにご招待したことがあります。たいへん喜ばれました。子どもだけでなく、両親もことのほか嬉しかったようです。難民の方々は経済的余裕がないことから、ディズニーランドに行くこともままならないのです。

以上のような事柄、あるいはその他の内容でもよいのですが、難民支援を無報酬で行うボランティア活動に興味がある方は JELA 事務局までご連絡いただけないでしょうか。自由に意見を交換し、有意義な支援活動をご一緒に考えて少しずつ形にしてゆきたく思います。

募集条件はとくにありませんが、交通アクセスを考えると、東京ないしは関東圏にお住まいの方がふさわしいと思っています。

## リラ・プレカリア (祈りのたて琴)を学びつつ

3期生 徳善規子



リラ・プレカリア (祈りのたて琴) の学びに加えていただいて、まもなく一年が終わろうとしております。あっという間の一年? いいえ苦しみの一年? とまどいの一年? 宝物を見つけた一年? どれも当たっていて、どれもちがうようなこの一年でした。そしてそれは今学んでいる「詩編」の内容でもあるようです。

人間がいつも神様に向かって訴えている、「嘆き」や「讚美」のことと同じ類いのものかもしれません。

リラ・プレカリア (祈りのたて琴) の中心になって、私たちを導いて下さるキャロル・サック先生は「詩編にはパラドックス - 逆説がたくさんある」とおっしゃいます。

十字架の旗を背負い、血を流した羊の絵を見たことがおありでしょうか。羊は贖いの主イエス・キリストの死を示し、しかし同時に死に勝って復活し死を克服した勝利の主なのです。私たちもいずれ神さまのみもとへ召されるものですが、復活のイエスさまによって御国へと導かれるものと信じます。そして多くの病床にある方たちに歌とハープによってよりそい、主の平安をお届けしたいと思っています。

最初の面接の時、日本福音ルーテル武蔵野教会の大柴譲治先生から「アブラハムは神さまから召命を受けたとき75才でした。あなたも苦しみを喜びに代えてがんばってください。」とお言葉をいただきました。今改めてそのお言葉をかみしめ、楽しみつつ神様の導きのままに過ごして行きたいと思います。

主に感謝!



詩編 23 1 賛歌 ダビデの詩。  
主は私の羊飼い、わたしには何も欠けることがない。

- 2 主は私を青草の原に休ませ  
憩いの水のほとりに伴い
- 3 魂を生き返らせてくださる。  
主は御名にふさわしく  
私を正しい道に導かれる。
- 4 死の陰の谷を行くときも  
わたしは災いを恐れない。  
あなたがわたしと共にいてくださる。  
あなたの鞭、あなたの杖  
それがわたしを力づける。
- 5 わたしを苦しめる者を前にしても  
あなたはわたしに  
食卓を整えてくださる。  
わたしの頭に香油を注ぎ  
わたしの杯をあふれさせてくださる。
- 6 命のある限り  
恵みと慈しみはいつもわたしを追う。  
主の家にわたしは帰り  
生涯、そこにとどまるであろう。

### これからのリラ・プレカリア公開講座

- |       |  |
|-------|--|
| 4月21日 | 藤井礼子「死を生きた娘」 「死を恐れる人たちへ - がんを受容した娘の生き方」著者                                |
| 4月28日 | 大柴譲治「罪責感情と羞恥感情について」 日本福音ルーテルむさしの教会牧師                                     |
| 5月12日 | 大柴譲治「罪と恥からの解放～母なる神のイメージ」 同上  |
| 5月19日 | キャロル・サック「恥を覆うものとしての音楽」 リラ・プレカリア (祈りのたて琴) 主宰                              |
| 5月26日 | マリ・マッケンジー「Prayer Shawls - 祈りのショール」米国福音ルーテル教会宣教師                          |
| 6月2日  | 柴田千頭男「詩編 71 - 母の胎にある時も老いた時にも」ルーテル学院大学名誉教授                                |
| 6月9日  | 里村生英「音楽を介したスピリチュアル・サポート - 11世紀クリューニー修道院のライフ・スタイルから学ぶ」 エリザベト音楽大学音楽文化学科准教授 |

# インドワークキャンプに参加して

感想文は抜粋したものです。全文はJELAのHPにて読むことができます。 <http://www.jela.or.jp>

テーマ「出会う」、主題聖句「どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めて、信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるように。」(エフェソ 3:16-17)のもとで行われたインドワークキャンプは、たくさんのお出会いの中で、参加者それぞれが色々なことを感じ、経験したようです。今後の彼らの成長を、皆さんのお祈りの中に覚えていただければ幸いです。

## 小川陽子 (東京都 在住)

ジャムケッドのきらきらと光る日差し、乾燥した緑、ゆっくりと流れる時間、それは日本の生活とはまったく異なる世界でした。様々な出会いがあり、それぞれに感性を研ぎ澄まされる思いをしました。そのなかでも一番強い印象を受けたのは、義足作りのチーフであるモーゼスさん(写真右頁下)です。開設前の何もなかったこの地へ建設作業員として来て働き、創立者のアロエ先生の思いに共感して、CRHPに残ることを決意したという方です。

CRHPでの義足作りは手作業です。その最終工程の一つ、何よりも細やかな心遣いと技術を要するフィッティングの調整をモーゼスさんは一手に担っていました。それぞれのために作られた義足を実際に装着してもらい、感覚を確かめ、歩行の状態を観察して感想を聞き、そして外して金槌でたたいて調整する作業です。無料で提供されるとはいえ、義足を待つ人に妥協はありません。新しい義足への喜びを表しつつも、ここはきつい、なんだかわからないなど様々な注文を繰り返すのです。そんな目の前の椅子に座る人と向き合い、ときには厳しく、自力で立ち上がらせ、ときには、心配していろいろ注文する人に、これで充分合っているよと諭す。個々人の思いや性格に合わせた細かい心配りを要する作業を、おだやかな表情でこなす様子には、奉仕することに対する自然な姿と、静かな満足感が映し出されていました。

ある日、モーゼスさんがふと語り始めました。「都市で働く息子はたくさん稼いでいて、一緒に暮らそうと言ってくれるんだよ。でも、自分はCRHPで暮らしたいんだ、ここで人の役に立てることが気に入っているんだ。」奉仕の気持ちを分かち合うこと、そして、それが互いに日々の活動に向き

合う支えになること。それがCRHPにあふれる恵みのひとつなのだと思います。その共有された時間と思いが、私たちにとって、また明日からそれぞれが、それぞれの場所で、それぞれの方法で奉仕をしているための大切な力となることを、このキャンプで心に刻みました。



## 森田晃史 (静岡県 在住)

一番印象深かった出会いは、足を失って義足を必要としている方たちでした。義足作りの作業では、このひとつひとつの作業がやがて完成し、義足を必要としている方たちの所に行くと考え、中途半端な気持ちではできないと思い、何度もこれでOKかを確認しながら必死に作業しました。なかなかきれいにできなかった中、やっとの思いで義足の型がある程度できて、それだけでうれしかったのに実際に試着してもらった機会があり、少し歩いてから私に笑顔でうなずいてくれました。この作業に携わった私は、とてもうれしく、わずかですが役に立てたことを実感しました。

義足の贈呈式では、いまかいまかと待ちわびていた人々が、ひとりひとり義足をはめていき、皆これでやっと歩けると思わんばかりの安堵した表情を浮かべており、私も自然と笑顔になっていきました。それから義足をはめた人から義足作りに関わった人たちにこのような言葉をいただきました。「私たち障害者は、足を失って自立できずにいましたが、この義足を付ければ頑張って自立できそうです」と。この言葉が私の中では、義足作りをできてよかったと思えましたし、初めて人のために直接役に立てたと実感できました。なにより腕や肩を抱えられながらも、一生懸命歩いて帰っていく後ろ姿に感動しました。

最初はインドというあまり良いイメージのない国に行くことに抵抗がありましたが、それを恐れず行けたことでこういった

大切な出会いがありましたので、やっぱりチャレンジすることが大事ということを知った気がしました。これからはやってみたくて自分の中で抵抗があるものがあったら踏み出せない場面があった時は、その先に自分にプラスがあると思うので恐れずチャレンジしていきたいと思っています。



## 石嶺陽平 (神奈川県 在住)

たくさんの忘れられない出会いがありました。CRHPのスタッフからは、働くことの楽しさとつらさを学びました。ヘルスワーカーたちとのディスカッションでは、インドでの女性の地位やカースト制度における自分の考えの浅さや無知さを知り、自分が今まで当たり前だと思ってきたものの大切さを実感することができました。幼稚園の子供たちからは、たくさんの笑顔と元気をもらいました。農場で働くラトナマラさんから神様を信じるのが与えてくれる確かな力を感じました。私たちが家族だと言ってくれたナイジェリアの友人たちからは、お互いが心を開けば、心が通じ合うのに言葉や文化は関係ないことを実感することができました。また彼らとキリスト教のかかわり方や、国や故郷を大切に思う気持ちも教えてもらいました。義足を待つ人々からは、どんな逆境にも負けない力強さを感じました。義足作りをした場所には義足のひとがたくさんいましたが、今の状況を悲観している様子はあまり感じませんでした。それどころか言葉も通じず、義足作りの技術も乏しい私たちをありのままに受け入れてくれました。

これらの出会いを通して私が感じたのは、出会いを大切にすることは思いやりのある人間になるための第一歩なのではないか、ということです。同じ行動がひとによっては喜んでくれたり、傷つけてしまったりすることがあります。思いやりのある人間になるにはいろんな立場でものを考

えられる力を持つことが必要です。インド人の立場、ナイジェリア人の立場、女性の立場、子供の立場、義足の人の立場……。出会いを大切に、そのひとのことをもっと知りたいと思うことで、その力は身につくのだと思います。これからも思いやりのある人間になるために、私は出会いを大切にしていきたいと思っています。



### 浅野ゆり（東京都 在住）

特に印象的だった出会いはヘルスワーカーの女性たちとの出会いです。ヘルスワーカーの仕事は、主に乳幼児のケア、出産の手伝い、ハンセン病などの患者のケア、ダムや排水溝の管理といったものが挙げられます。私は、彼女らに「ヘルスワーカーになって自分の中で変化したことはありますか?」と尋ねたところ、思いもしない答えが返ってきました。それは「まず人間であることを自覚し、それから自信を得て、悩むことなくみんなと一緒にいられるようになった。」というものです。それを聴いて私は正直ショックを受けました。そのショックは、私自身、自分が人間であることを自覚したことなど一度もなく、むしろ自分が人間であるということは私にとって当たり前だという考えから生まれたのだと思います。

またインドの女性は、10代のうちに結

婚し出産を迎え家事をするというのが一般的で、日本のように大学を出てキャリアウーマンとして社会で働いている女性はほんの一握りにすぎません。私は同じ女性の立場であっても住む場所や環境によって自分の中では当然だと思っていることが実はそうではないということに気づかされ、CRHPの働きの中に女性の自立支援が含まれている必要性を知ることが出来ました。一人でも多くの女性に人間らしく生きていける権利・環境が与えられることを祈っていききたいと思います。

神様から私へのメッセージは、他者のことを理解し考え、何が正しい正しくないというわけではなく、人それぞれの生き方や歩み方があるということではないかと思っています。今回のワークキャンプにおいて、自分以外の人の価値観やライフスタイルに触れる機会が非常に多くありました。そういう時、どうしても自分の考えと比較してしまいがちでしたが、分かち合いなどを通して相手の気持ちになって考えるということが大切であるということを実感しました。



### 大柴 翔（東京都 在住）

ある日の Devotion の中で私に強く信仰というものを考えさせる機会があった。(Devotion とは一日の出来事を、神様を通

して振り返りみんなで話し、祈りを行う事である。毎日数時間、10人で集まり真剣に時には楽しく Devotion を行う。日本語にすると「分かち合い」と呼ばれるものである。)未だに自分の都合のいい時だけ神様を信じてはいないだろうか。そんな疑問がふと湧いたのだ。

そんな時、CRHP に同時期に滞在していたナイジェリア人の一人の男性に聞いた話には私は感銘を受けた。「神様は『絶対』であり、『始め』であり、『終わり』でもある。そして、いつでも神様は私たちを信じてくれている。」なんとなく、数日前に湧いた疑問の答えに近づいた気がした。「神様は私たちの全てを受け止めてくれる。」そう考えるだけで少し楽になった。きっと私たちは難しい事を考える必要は無いのだと。ただ神様を信じれば良い、それだけなのだ。ナイジェリアの男性は最後にこう言っていた。「神様は Love だ」と。そのままの私たちを神は愛されていると。

ある晩、特別仲良くなった一人のナイジェリア人とインドで見える綺麗な星の話をしていて。私がふと「日本では流れ星を見て、消える前に願い事をする、その願い事が叶うんだよ。」と言うと「ナイジェリアでは流れ星は bad news を運んでくるんだ。」と彼は言った。文化の違いだね。なんて笑って話していたのだが、彼が「じゃ、もう寝るよ」と言い、部屋に帰ろうとしたときに彼はこうも言った。「じゃナイジェリアに帰って流れ星を見たら『またいつの日か、Sho に逢えるように』と願うよ!」この言葉が私の心には強く残った。いまこの文章は東京の自宅で書いている。東京からは流れ星は滅多に見えないけれど、もし見つける事が出来たら一つだけ願いたい。「神様、また彼に逢えますように」と。



村の人たちと全員で記念撮影



村の人との対話



義足作り作業



子どもたちと遊ぶ



モーゼスさん



義足のフィッティングに行く



### 中村 楽 (愛知県 在住)

一番印象に残った出会いは CRHP で出会ったナイジェリアのウィリアムスという男性でした。

彼は、私が「Who is GOD to you?(あなたにとって神とは何ですか?)」と尋ねたところ、自分の信仰について英語がほとんど話せず聞き取れない私に丁寧に語ってくれました。

「私の家庭はクリスチャンホームで、小さい頃から日曜学校に通っていました。しかしそれは私がクリスチャンになった理由ではありません。日曜学校で神様について勉強し、イエス様が私たちの罪のために死んで、私たちの罪が洗われたことを学びました。そして信仰をもってすれば永遠の命(魂の命)を得ることができます。洗礼は拒否することもできましたが、小さいころから教えを受けていたため自然と心に納まりました。私にとって神は全てです。」

彼らの答えを聞くと、信仰によって得ることのできたアイデンティティというのは、生きる糧になり支えになる本当の強さなのだ、と身をもって感じる事が出来ました。また彼らは何も考えず、流れのままに信仰を得たのではないということも強く伝わってきました。

ウィリアムスの信仰を通して、神様は私に「そんなに難しく考える必要はない」と伝えてくれた気がします。実際ウィリアムスに「あなたはどのようなのですか?」と聞かれて、答えることができず「わかりません」と答えてしまいました。そのとき私は自分の中の神様というものを理論で考えたり、論理的な思考になっていたでしょう。神様とはそういうものではないと思えるようになりました。

ウィリアムスのように、私にとって神様は全てですと言えるようになるかは分かりませんが、私の中の信仰を軸にした自立、アイデンティティの確立、キリスト教的独立人になれるよう、これからも神様と共に祈りながら自分の中の信仰を確かなものにしていきたいと思います。



### 立野愛美 (広島県 在住)

このキャンプで一番印象に残ったことは、毎日の会話記録です。牧師先生から、毎日テーマをもらい、テーマにそっている人と会話をするという事です。テーマは「女性と出会う」「義足を必要としている人と出会う」「クリスチャンと出会う」などでした。会話記録を書くためには、その人とコミュニケーションをとらなくてはいいけません。初めは、言葉が通じないと思うと、声をかける勇気をだすことが大変だと感じました。しかし、実際に話しかけてみると言葉が通じなくても、ジェスチャーや笑顔で意思疎通が出来るように感じられました。

そして現在の日本ではあまり考えられないような光がない部屋でせまい場所に家族全員が暮らしているという事実にも出会いました。しかし生活をしている人はとても幸せそうで、毎日を過ごしているように感じました。私が悲惨だと思ったことが、インドでの生活では当たり前のことであって、悲惨だと考えるのはおかしいという思考を持つことが出来ました。

CRHP 内にある幼稚園に行くことも出来ました。幼稚園に来ている子ども達の目は輝いていて、とても元気でした。折り紙をしたり、走り回ったり、すぐに仲良く遊ぶことが出来ました。子ども達が「マイン!(私も!)」と何度も言っている姿をみて、日本と同じ光景を見ることができたと思います。インドでは、親に愛されて育っていない子どもが多いと聞きました。しかし、どこの国でも、子どもは素直で優しい心を持っていると実感しました。

このキャンプを通して人とのつながりが強くなったと思います。一人ひとりが価値のある存在だという事に改めて気付きました。沢山の出会いの機会を神様から頂いたと思っています。出会った人たちが、どこの国でどんな生活しようと、同じ人間なんだと実感しました。そして自分という存在を大切にしていってほしいなと思いました。



### 和田八重子 (千葉県 在住)

講堂に60人位の義足の出来るのを待っていた人たちが集まって、義足を贈呈されるのを待つ姿は、イエスがガリラヤ湖のほとりで、多くの病人をいやした時は、もっとたくさんの人が集まったのだらうと思わせるものでした。

遠くからやってきて、何日も泊りがけで待っていた人たちはシャワーも無しで、待っていたのかもしれませんが。長い間義足を履いていた足の蒸れかもしれません。独特のにおいが古くなった義足を外した時にしました。少年の大腿部からの義足は2本のベルトで胸回りと腰回りで固定します。そのサイズがぴたりと合って、嬉しそうでした。でも、歩き出す時に、何かにつかまらないと歩き出せませんでした。どこかで転んだら、すぐに立ち上げられるのかしら? 転んだ時自動車が轢かれないように、祈りました。

美しい女性は、ボランティア仲間から「あの義足だったの?」の声が聞かれるくらい、サリーに隠れて解らない義足でした。足を選ぶ時も山のように積んである足の中から、熱心に、形のいい細身の足を探していたのが印象的でした。少し恥ずかしそうに、サリーの裾を開けて義足をつけていました。ベルトを締める手伝いをしましたが、こんなに閉めては痛いのではないと思うほどしっかり取れないように閉めます。「やっぱり……痛くないってことはないと思うな……」心でつぶやいた私でした。その女性は、今までつけていた義足を大事そうに抱えて持ち帰っていました。分身そのものという感じでした。

私は義足作りでは、ほんの少ししかお手伝いできなかったのに、こんな感動的な場面に立ち合わせていただき申し訳ないと思うか、恥ずかしいと思うか、そんな感じでした。でも、「それでいいんだよ、その気持ちだけでいいんだよ」と天井のあたりから、イエスに見守られているような感じがしました。



ブラジルでの奉仕を終え、この3月初旬に帰国した中島滙(なかしま・みぎわ)さんが、2年間のボランティア奉仕で気づいたことをスケッチ風に綴ってくださいました。

### ○子どもとの関わり(学ぶ心)

今でも記憶に残っています。初めて施設を訪問した時のことです。正午前に着いたので、施設の方がお昼ご飯(子ども達と同じ食事)を食べて行きなさいと用意して下さいました。1人で食べていると2人の子どもが興味津々で僕の前に座り、「どこから来たの?」「おいしい?」など質問攻め。片言のポルトガル語で話すと「わはは」と大笑い。「なんだ?なんだ? 変なこと言ったかな」と思ったら、話し方が赤ちゃん言葉で面白いらしい。子ども達とも打ち解け、その日の午後には一躍人気者になりました。

子ども達はまだ言葉が話せない僕に分かりやすくポルトガル語を教えてくださいました。例えば、車が道にあると指さして「カーホ」、木があると「アルポリ」と簡単な単語を教えてくださいました。たまに、発音しづらい単語だと赤ちゃん言葉になるので、ゲラゲラと子ども達は笑っていましたが。

この経験で感じたことは、学ぶ心があれば僕にとって誰でも師になり、子ども達はポルトガル語やブラジル文化の先生だったということです。



### ○挨拶を通しての愛情

ブラジルの挨拶は男同士であれば握手(仲が良ければ抱擁もする)、男女・女女であれば頬にキスをする習慣があり

ます。挨拶だけでなく普段の生活の中で良く抱擁もします(コミュニケーションの一つとして)。この習慣は、僕は大好きで、とても重要なことだと思いました。なぜなら、人の肌と肌が触れ合うことで「愛されている」と感じる事が出来たからです。初めの頃は、慣れない部分もあり頬にキスをされると「この人僕のこと好きなのかな?」と思ったりもしましたが。昨年のニュースで自殺者が増えたのを聞きました。もし誰か彼らのことを愛してあげることが出来ていれば自殺という選択はしなかったのではないだろうかと考えることがあります。今後僕が関わる人には、僕に愛されていると感じてもらえるようにしていきたいです。



### ○ポルトガル語(愛情表現)

僕の好きな言葉でブラジル人が良く口にする言葉は amor (アモール) と querido (ケリード) です。Amor は愛する、querido も amor と同じような意味で、使い方としては名前を呼ぶ代わりに良く amor、querido を使います。習慣的な、親しい人への挨拶言葉です。直訳すると、「アモール」と言われたら「愛する人」と呼ばれているので、ここでも愛されていると感じました。



### ○夢

施設の子供達に「将来の夢は何?」と聞いたことがあります。例えば、日本の子どもと同じ質問をすると、美容師、野球選手、F1レーサー、パン屋さん等々、「夢」を持っているけれど、施設の子供達は「ない」と答える子どもが多い。「なんで? ないの?」と聞くと「わからない」と返ってきました。ブラジルの習慣で、先のことを考えるよりも今を楽しく生きる考え方が根付いているからでしょうか?

また、1人の青年に話を聞くとリアルな答えが返ってきた。生活するお金の為に働かないといけないし(両親が働いていない)、大学に行く時間やお金がない。僕が施設で活動する中で、何人かの子どもは「日本に行きたい」「マンガを描きたい」など沢山の夢を僕に語ってくれました。子ども達が夢を抱いて施設で学べる環境を今後とも支援していきたいと考えています。



### ○生徒との関わりで気づかされたこと(親の気持ち)

僕は、「Cultura japonesa」(日本文化)のクラスを持ち、特に青年(15才から18才)と深く関わりました。日本語の読み書きや折り紙、日本音楽や遊びなど沢山のことを教え、彼らと真剣に向き合うことで僕は「愛情や感謝の気持ち」を学びました。彼らは素直で僕がすること全てを受け入れてくれました。だからこそ、授業する時は「楽しく覚える」をテーマに、どのように彼らが楽しく日本語を覚える事が出来るか試行錯誤しながら教えていました。その中で彼らとの信頼関係を築くことができ、帰国するまでの半年間で親子の様な絆が生まれ、この子の為なら何でもしてあげたい、という気持ちになりました。まだ子どもがいないけれど、親が子どもを愛する気持ちはどのようなものか感じる事ができました。

日本で支えてくれた JELA、ブラジルで出会った人々に感謝の気持ちでいっぱいです。

## 第8回「世界の子ども支援・東日本大震災救援チャリティコンサート」のお知らせ

●テーマ：Helping Children in Need 飢えや病気に苦しむ子どもたちに愛と希望を!

●主催

日本福音ルーテル社団 (JELA) / 日本福音ルーテル教会・世界宣教委員会

●協賛団体(一部交渉中)

シュローダー証券投資顧問株式会社/野村證券株式会社/石橋葬儀社/株式会社ハリファックスアソシエイツ/株式会社西村建築設計事務所/有限会社リフォーム・イケ/株式会社 WING / 医療法人社団愛育会福田病院/有限会社タジリ住宅建設/本郷学生センター(以上、順不同)

●日程・会場(※= 子ども向けコンサート)

■5月13日(金)午後2時と午後7時の2回

日本福音ルーテル甲府教会

■5月14日(土)午後2時

日本福音ルーテル松本教会

■5月15日(日)午後1時半

日本福音ルーテル保谷教会

■5月16日(月)午後4時

日本福音ルーテル小岩教会 ※

■5月19日(木)午前10時

日本福音ルーテル田園調布教会 ※

■5月20日(金)午前10時半

日本福音ルーテル蒲田教会 ※

■5月21日(土)午後2時

日本福音ルーテル知多教会 半田礼拝所

■5月22日(土)午後2時

日本福音ルーテル清水教会

■5月28日(土)午後7時

日本福音ルーテル神水教会

■5月30日(月)午前10時半

日本福音ルーテル玉名教会 ※

(注)開場は上記の30分前。入場無料。ただし席上献金あり。

●演奏者

上野由恵氏

東京芸術大学音楽学部附属音楽高校を経て、同大学をアカンサス音楽賞を得て首席卒業。2008年同大学大学院修士課程修了。

2004年第2回東京音楽コンクール第1位。

2004年第15回日本木管コンクール第1位、聴衆賞。

2007年第76回日本音楽コンクール第1位、聴衆賞。

これまでに、読売日本交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、セントラル愛知交響楽団、京都市交響楽団、芸大フィルハーモニー管弦楽団、瀬戸フィルハーモニー交響楽団、チェコ・フィルハーモニー室内管弦楽団、チェコ・フィルハーモニー六重奏団、ベルリン・フィル首席奏者によるアマールコルト・カルテット・ベルリン等と多数共演。

全国各地でのソロリサイタルの他、皇居内桃華楽堂での御前演奏や、首相官邸での日中首脳会談晩餐会で演奏を披露。また、「NHK-FM名曲リサイタル」、「N響広場」、「気ままにクラシック」等、多数のラジオやテレビ番組に出演。

圓井晶子氏

4歳よりピアノを始める。

東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、同大学音楽学部器楽科卒業。

2008年同大学大学院音楽研究科修士課程修了。

2006年奏楽堂にて【藝大の響き】「シューマン・プロジェクト」出演。

2007年旧奏楽堂にて「木曜コンサート」出演。

2008年カワイ表参道コンサートサロン「リバゼ」にて、ジョイント・リサイタル出演。

2008~2009年 K-BALLET GROUP にて専属ピアニストを務める。

現在、ソロ、アンサンブルにて各地にて演奏活動を行っている。

●演奏予定曲目

エルガー:愛の挨拶

フォーレ:シチリアーナ

ビゼー:アルルの女よりメヌエット

R=コルサコフ:熊蜂の飛行

パッハ管弦楽組曲第2番よりポロネーズとパティネリ

多忠亮:宵待草

山田耕作:この道

イサン・ユン:エチュードより第5番

教会讃美歌より

ビゼー=ボルス:カルメン幻想曲

(注)曲目は変更になる可能性があります。子ども向けコンサートのプログラムは上記と異なります。

●献金の用途

3月11日の東日本大震災で被災した子どもたちやそのご家族のために用います。

●CDの販売

上野由恵氏がこのチャリティコンサートのために制作したCD「Amazing Grace」を会場にて販売予定。CDには「アメイジング・グレイス」の他に、教会讃美歌より14曲を収録。

●問合せ総合窓口

日本福音ルーテル社団 (JELA)

150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26

電話:03-3447-1521

ファックス:03-3447-1523

E-mail: jela@jela.or.jp

## お知らせ

### 東日本大震災被災者救援のためのご寄付のお願い

3月11日に起こりました東日本大震災の被災者、ご家族、関係者の皆さまに、心よりお見舞い申し上げます。ご家族を亡くされた方々、一瞬のうちに家や財産のすべてを失った方々の深い悲しみがいまなお日本全土を覆っています。この未曾有の大災害に対して、全世界から支援の手が差し伸べられたことは大きな励みです。わたくしども JELA といたしましても、少しでも被災者の皆さまのお役にたてればと考え、下記の通りご寄付を募りますので、ご協力のほど、よろしく願い申し上げます。

2011年4月

日本福音ルーテル社団 (JELA)

理事長 中川浩之

●ご送金先

同封の、あるいは郵便局備え付けの郵便振替用紙に「東日本大震災」と明記して、下記口座にご送金くださいますよう、お願い申し上げます。

郵便振替口座番号: 00140-0-669206

加入者名: 日本福音ルーテル社団

## 支援者一覧

(2010年10月1日~2011年2月28日)

青木孝士/ 鶴田信子/ 秋元学/ 浅見正一/ 安藤淑子/ 石川史志/ 石崎勝/ 石澤とし子/ 泉洋子/ 石原京子/ 石原勇/ 石森京子/ ウエスト東京ユニオン・チャーチ/ 鳥飼勝隆/ 豊子/ 梅田満子/ 浦和ルーテル学院/ 江澤妙子/ 大澤朝子/ 太田三男/ 大塚真佐子/ 大中真理/ 加藤京子/ 蒲田ルーテル教会女性の会/ 神谷智子/ 株式会社コーシン/ カトリック徳田教会/ 兼岩恵美子/ 京谷信代/ 岐阜キングスガーデン支える会/ 九州学院中・高校生徒・教職員一同/ 九州学院みどり幼稚園/ 国立のぞみ教会/ 倉重ミドリ/ 倉知延章/ 公衆衛生看護の会/ 児島和子/ 小林かつみ/ 小林中子/ 小菅可代/ 西条ルーテル幼稚園/ 崎山たまも/ 桜井永之/ 佐藤義雄/ 社会福祉法人清泉保育園/ 霜尾閑子/ 杉浦りえ/ 鈴木辰典/ 米子/ 鈴木やす/ 鈴木泰子/ 聖望学園 (マイケル・ピースカー) / 関淑子/ 高橋ふく子/ 竹森洋子/ 田坂仁/ 田口理梨花/ 高田紀子/ 立山久美子/ 玉名ルーテル幼稚園/ 田中美紗子/ 谷口孝一/ 田園調布ルーテル幼稚園/ 長良キリスト教会/ 中村孝治/ 敬子/ 中川浩之/ 日本福音ルーテル下関教会シャローム会/ 日本福音ルーテル甲府教会/ 日本福音ルーテル田園調布教会学校 CS / 日本福音ルーテル市ヶ谷教会婦人会/ 日本福音ルーテル三鷹教会/ 日本福音ルーテル大岡山教会学校 CS 小学校/ 日本福音ルーテル都南教会学校/ 日本福音ルーテル都南教会 (太田一彦) / 日本福音ルーテル小石川教会/ 日本福音ルーテル大分教会/ 日本福音ルーテル保谷教会/ 日本福音ルーテル玉名教会/ 日本福音ルーテル博多教会バザー委員会/ 日本福音ルーテル鉧路教会/ 新村晶子/ 西垣親子/ 西立野園子/ 野田マサ子/ 芳賀明子/ 芳賀美江/ 服部令子/ 早瀬康平/ 針田真由子/ 平島徳蔵/ 藤井浩/ 礼子/ 藤橋日出子/ 古川博子/ 古川文江/ 古川知代子/ 細山千恵子/ 本多順一/ 前川隆一/ 益永和代/ 松澤眞子/ 眞淳平/ 松浦雪子/ 丸山祐史/ 水原一郎/ 久美子/ 南節子/ 森重美恵/ 森保宏/ 森涼子/ 森田七三郎/ 八坂由貴子/ 安井則夫/ 山際喜佐夫/ 山崎順子/ 山本了/ 山本孝恵/ 山本一男/ 山崎恵美子/ 山崎眞由美/ 若原奇美子/ 渡辺純子 / Aaron and Lynette Albrecht / Del and Betty Anderson / Dave and Nahoko Person / Eleanor Cunningham / Eric Hanson / Ken and Eloise Dale / Lowell Gretebeck / Marcia kawashima / P.Beche 匿名複数

以上、敬称略。ご支援ありがとうございました。匿名をご希望の場合は、ご送金の際にお知らせ下さい。

### 編集後記

このたびの東日本大震災の被災者の皆様に心からお見舞い申し上げます。宮城や福島で被災し、避難所からメールをくださる方がいらっしゃいます。ある方のメールには、浸水した自宅に戻った感想が記されていました。「……家に行って少しずつ片づけましたが、ドロドロで思うようにならず、ライフラインも復旧せず、作業が進みませんでした。だんだん疲れて悲しくなりましたが、昼ご飯を食べながら空を見上げたら、青い空に白い雲が、何もなかったかのようにのんびり流れていました。現実ばかり見て、破壊された現場ばかり見て、この一週間必死で過ごしましたが、八方がふさがってどうにもならないように見えても、天はいつでもあいていて、神様が私たちを助けてくださっていることに気がつきました……。読んでいるこちらが励まされます。日々、被災者の方々のことを祈りに覚え、できることをなすことで、少しでも苦しみを分かちあえればと思います (M)

